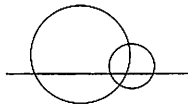


〈企画展に関わって〉



東亜同文書院大学記念センター 初の企画展（2本立て。2010年5～7月開催）に関わって

大学史事務室 佃 隆一郎

愛知大学東亜同文書院大学記念センターにとって初めてになる“学内での企画展示”が、2010（平成22）年度に入ってから（後述する大学史資料協議会例会開催に合わせて）実現の運びとなり、「愛知大学生・卒業生の活躍のあゆみ」および「豊橋校舎の地が軍隊の敷地だった頃」として、10年5月20日より本学豊橋校舎大学記念館内にて開催された。そして私はここで、展示品の選定や、使用パネル・キャプションの製作について、（個人研究との関連もあって）中心的役割を担うことになったので、以下その内容を報告してみる。

この企画展の意義・目的は、2007年の愛知大学史展示室リニューアルの際割愛した、“施設としてのいわば前史である旧陸軍時代”と“学生・卒業生の側から見た愛知大学史”という2つの視点・分野について、以前の展示室でのものを活用しつつ改めて本格的に展示することによって、教職員・在学生のみならず地域一般の方々や卒業生の皆さまにも、興味深く本学の多面的な歴史を理解していただきたいことにあった。

展示にあたっては「“軍都”豊橋と（作家の）井上靖」「38年ぶりの卒業式」といったように、トピックを数点ずつ設定してそれぞれの説明をA1サイズのパネルで（簡易な形ながら）新規に製作し、アクセントにした。

会場となった部屋（2つ分で出入口は1ヵ所）は手前を「…学生・卒業生の活躍…」、奥を「…軍隊の敷地だった頃」と、あえて時系列を逆にし

たが、これは参観者に“旧軍＝愛知大学”との誤解を与えさせないためと、代表的卒業生の写真パネルを外から見える場所に置いて関心をひく効果をねらったためである。

そして両方のコーナーが別々に完結する形になるよう資料を選定し、それぞれにキャプションボードを作製して用意した（各展示資料とキャプションはA1パネルともども、本文のあとに別掲）。さらに展示期間に入ってまもなく、文学部の卒業生である末次秀行氏（当時中日新聞社運動部勤務）のご好意により、現在プロ野球で活躍している岩瀬仁紀・中日ドラゴンズ投手（経済学部卒）のパネルを飾ることができた（本文中写真参照）。ここに改めて感謝申し上げる。

限られたスペースと期間のなかでの展示であったが、各種協議会や学会での“愛知大学の紹介”の一端も兼ねて、会期中本学にて開かれた「東日本大学史資料協議会」例会への参加者をはじめとする、各方面の方々へのご案内に努めてみた。そしておかげをもって、当初6月19日までの予定であった期間を、7月17日まで約1ヵ月延長させていただくことができた。

会期中どれほどの参観者が訪れ、どれほどの反響があったかについては、（具体的なカウントや全体的なアンケートの実施を見合わせたこともあって）確定・把握にいたらなかった面があるが、両分野とも今後さらに充実させた展示を、豊橋校舎記念館のみならず様々な場所で行なえるよう努

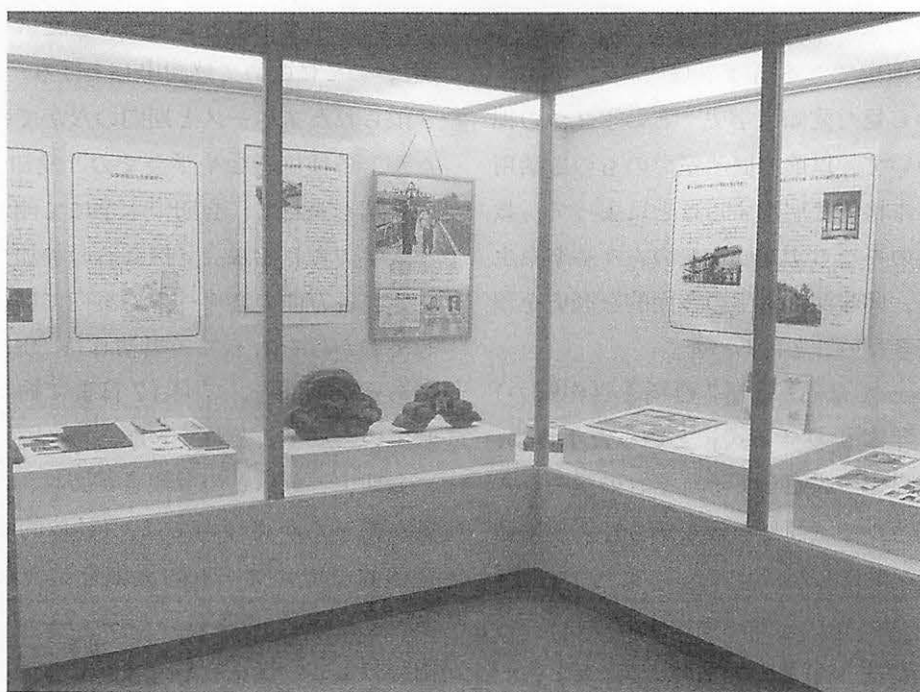


めなければならないし、そのためのきっかけとして今回の展示を位置づけ、省みなければなるまい。なお別項で報告されている、約半年後の同年11月末に松坂屋名古屋店南館で行なった「東亜同文

書院大学記念センター資料の展示会」で、岩瀬投手パネルをはじめとする卒業生関連の説明・紹介を一部再利用したことを、最後にここでも併せて述べておきたい。



「学生・卒業生」をコンセプトにした企画展示室（岩瀬投手パネルを中心に撮影）



「軍隊の敷地だった頃」をコンセプトにした企画展示室（予備士官学校～愛大創設期の部分）

・企画展用に製作したA1パネル（主要部）


〔学生・卒業生用〕

創設期の運動部・文化部の活動


劣悪な環境下で創設された愛知大学であったが、次第に運動部や文化部の活動は活発になってきた。

運動部では野球部・馬術部・柔道部（当初同好会）・卓球部等の成績がぬきんで経営学研究会・演劇研究会・児童文化部・新聞部等を中心に、各方面において積極的な活動を展開した。新聞部では1948（昭和23）年いち早く新聞研究室が設けられ、教員と学生有志との共同による『愛知大学新聞』が創刊された。これには実務面で懇切な指導を惜しまなかった各社新聞人の尽力も大きく、全国学生新聞連盟の委員校として発展していった。

旧軍隊のいわば遺産として、豊橋校舎内には当時から現在にいたるまで馬場が設けられているのであって、1950（昭和25）年の愛知国体での馬術競技会場となった。国体では馬術部のほか、柔道部と卓球部が1954年に愛知県代表としてそろって出場した。現在中日ドラゴンズの岩瀬仁紀投手らを輩出している硬式野球部は、1955（昭和30）年に初めてプロ野球チームへの入団を果たし、その2年後には、3度目の代表校となった全日本大学選手権大会でベスト4まで進出した。



中国研究言語学部機関誌



大会での柔道部メンバー（岐阜大学にて）

第1回卒業生は13名


愛知大学は1948（昭和23）年3月27日、その最初の卒業生を送り出す第1回卒業式を、豊橋校舎講堂（旧陸軍予備士官学校講堂。現第二体育館）で挙行了た。

巣立っていった卒業生は、まだわずか13名に過ぎなかったが、彼らは本学の新しい学風を身につけ、その優秀さのゆえに、それぞれ外務省や新聞社などに就職し、また大学教師になった者もあり、そのうち社会的に大いに活躍することになった。

旧制学部の卒業生数一覧

卒業年度	法経学部		計
	法政科	経済科	
1947		13	13
1948	5	13	18
1949	31	93	124
1950	34	96	130
1951	60	125	185
1952	93	204	297
計	223	544	767

最後の1952年度は、新制学部1期生との合同卒業式となり、新制の473名と合わせて計770名が卒業




創設期の卒業式での記念撮影

中日文化賞受賞者


地元の中日新聞社が1948（昭和23）年以降、毎年各分野で文化の向上に寄与した各人に贈っている「中日文化賞」を、愛知大学関係者では下の表の通り、2005（平成17）年まで計8名が受賞している。このうち、玉城肇・久曾神昇の両氏はのち本学学長に就任することになるが、ここでは最近になって本学関係者が3年連続して受賞したことを、そのなかでも東松照明・平松礼二の両氏がそれ以前の関係者とは異なり、本学の卒業生としての受賞者となったことに注目したい。

2003および04年の受賞者である、写真家の東松氏は1954年に、日本画家の平松氏は1964年にそれぞれ卒業し、芸術活動を続けている人であり、愛知大学の代表的卒業生といえる存在となっている。両氏の作品はともに高い評価を受けていて、本学の広告看板や学内の装飾にも、それぞれの力作が活用されている。



第58回中日文化賞祝賀式

第58回受賞 加々美光行教授



38年後の卒業式に集まった1972年卒業生一同

「中日文化賞」受賞者中の愛知大学関係者

回	受賞年	受賞者	本学との関係	受賞題目
10	1957	丸山 薫	教員	現代詩への貢献と後進の指導
13	1960	玉城 肇	教員	「日本における大家族制の研究」の完成と家族制度史の研究
15	1962	久曾神昇	教員	古今和歌集成立論の研究
21	1968	鈴木 操郎	教員	『中日大辞典』の完成
46	1993	河合雅雄	教員	サル学の研究と人類発生についての独自の学説
56	2003	東松 照明	卒業生	戦後の日本の撮影を通じた優れた写真表現
57	2004	平松 礼二	卒業生	日本画の創造的展開
58	2005	加々美光行	教員	現代中国研究と日中學術交流面への貢献

38年待った卒業式

大学紛争で卒業式ができなかった愛知大学の1972（昭和47）年卒業生約300人が2010（平成22）年3月24日、名古屋市中区の市公会堂であった名古屋校舎卒業式に38年遅れで出席し、卒業式への参加証明書を授与された。学費値上げ反対運動が激しかった72年には卒業式を閉鎖し、卒業生2389人に証書を郵送しただけだった。2009年2月の同窓会和歌山支部総会で、大阪支部長が学長に事情を伝え、多くの該当卒業生が還暦前後になったのを機に式が企画された。

式ではその大阪支部長から「このような機会を与えて下さり、感謝しています」との謝辞が述べられ、代表で参加証明書を受け取った卒業生も「人生の新しいスタートという感じがし、エネルギーをもらった」と喜びを表した。

地元ラジオ局人気番組のパーソナリティー、つボイノリオさんも72年の卒業生として参加し、式の様子をラジオ中継した。つボイさんは「こういう歳になると、人生の通過儀礼ってやっぱり必要なんだとわかる。一つの区切りをしまじみと迎えられ、よかった」と感激していた。

〔中日新聞〕2010年3月25日付記事より。
掲載に際し字句表現を一部修正いたしました。

〔旧軍施設用〕

旧軍施設時代 —「軍都」だった豊橋地区—

愛知大学豊橋校舎とその周辺の地にはかつて、第十五師団など旧陸軍の各部隊・学校が存在していた。



師団司令部時代の記念館

日露戦争末期に千葉県で編成された第十五師団は、1908（明治41）年に豊橋地区に移駐し、南郊のこの地（当時の饒美郡高師村）にこの記念館（当時の師団司令部）をはじめとする、一次衛戍地（現在でいう駐屯地）が建設された。そして、約1万

名の将兵が常駐することになった豊橋は、軍との物心両面の結びつきを強めた「軍都」として発展していった。

しかし1925（大正14）年には、第一次世界大戦後の軍縮世論の高まりによって、第十五師団は廃止され、この地の大部分は広大な遊休地と化した。これに対し豊橋では、「独創的なグレート豊橋の建設」（当時の地元紙の表現）のために、それら遊休地の買取り、転用などが画策された。しかし、結局師団跡は1927（昭和2）年、軍改編の一環として新設された陸軍教導学校に転用された。続く同学校の拡張、さらには（第一）予備士官学校への移行によって、現記念館は軍隊教育と「軍都」豊橋のシンボルとして存在しつづけることになった。

1945（昭和20）年の敗戦時、豊橋の市街地は空襲で灰燼に帰してしまっただけでなく、焼失を免れたこの地の各施設は、新たな志を胸に中国ほか「外地」より引き揚げてきた人々らによって受け継がれる日を持つことになったのである。



豊橋第一陸軍予備士官学校などの航空写真

「軍都」豊橋と井上靖

戦前の豊橋の別称であった「軍都」とは、どのようなものであったろうか。

本康宏氏は著書『軍都の歴史空間』（吉川弘文館刊）で「軍都」を、「当該都市の隣りに師団等の軍隊やその施設が存在が構造的な影響を与えていた地方中核都市」と定義している。その意味で豊橋地区は、第十五師団本部やその参加の各連隊が複数駐留することになり、師団進出にあたって南部郊外（この一帯）に一次駐屯地が造成、建設され、都市拡大の契機になったことから、典型的な「軍都」であったと言える。同様だったケースとしては、宇都宮、高田（新潟県）、岡山、久留米などの各地方都市があげられる。



井上靖の父が赴任していた歩兵第十八連隊駐屯地跡（現豊橋公園入口）

『教壇』『嵐山』などの小説家として知られる井上靖は、父親が軍医として豊橋に赴任していたことから、幼少期には住んでいた伊豆半島からよく豊橋に

来ていた。その思い出を井上は、自伝的小説『しろはんば』のなかで、豊橋の活気を描写するとともに、主人公とともに豊橋を見て帰った「おぬいばあさん」の自慢話として、「三島に師団があるかや、静岡だって連隊だけじゃ」「豊橋というところは、あんた、師団がある。師団というものは連隊の寄り集まったところじゃ。それ一考えただけでも、豊橋が三島と較べられたら、豊橋が位くわ」と語らせている。元来底松をはじめ、静岡県下の各都市との結びつきが強かった豊橋とは、連隊のみの静岡・浜松を上をいく「師団のある街」として、少なくとも静岡県方面からは一置かれる存在であったことが、この一節からうかがえるのである。



第十五師団を廃止させた宇垣陸軍大臣の“賭け”

豊橋の第十五師団が廃止された1925（大正14）年5月1日の陸軍軍縮は、実行責任者の宇垣一成陸軍大臣にちなんで「宇垣軍縮」と呼ばれている。これは第一次世界大戦後のワシントン海軍軍縮条約に対応する形でその3年前に行なわれた、前任者による陸軍軍縮が師団（海軍の主力艦に相当する戦力単位）の削減をしなかったことで、政界やマスコミから不徹底と批判されたのをうけての「やり直し」としてのものであった。ここで宇垣は一挙に、第十五師団など4個の師団を廃止したのである。



宇垣一成陸軍大臣

宇垣は軍縮実施日の日記（正確には随想録）に、師団削減断行について

「裏の理由は世論に先手を打ったのだ。国民が叫んでいる師団削減の声に先んじて英断を下し、節減経費を軍備の改善に転用することで、世論を軍の革新に導いたのだ。さらにこれによって部隊の廃止がその地元で打撃を与えるかを国民に目覚させてやったのだ。これからは政治家はともかく、国民は二度と師団削減など口にするまい」（部分要約、口語化）と、決意と自信のほどを示している。

実際、この軍縮での節減経費は軍備改良に転用されたのであり、その他さまざまな政治的施策を講じた宇垣は、日本陸軍の近代化を進めたとともに、政界に進出する態勢を整えることになった。しかし、師団削減を軍内の一部から恨まれた宇垣は、のちに首相の座に就くチャンスを与えたものの、陸軍の反対にあい幻と終わることになる。その意味で宇垣が行なった軍縮は、彼自身にとって危険な“賭け”といえるものであったが、宇垣の目論みは日記の通り、豊橋など廃止師団の所在地に突きつけられることにもなったのである。

宇垣軍縮の骨子と特徴

—1920年代後半（大正～昭和期）にもあった「部隊移転問題」—

関東大震災後の行財政整理の一環として、3年前の山梨軍縮に続いて1925（大正14）年に行なわれた宇垣軍縮は、陸軍再軍縮の要求に応じながら軍備の近代化を実現するために構想されたものであり、思いきって4個師団を廃止すると引きかえに、それによって節約された費用を戦車隊・飛行隊の設置などの財源として転用させることが基本骨子であった。さらに師団廃止により余剰となった現役将校を、中等・高等教育の各学校に配属させて軍事教練を行なわせるとともに、16歳から20歳までの勤労青年を対象とする青年訓練所を全国市町村に設置し、在郷軍人会と結びつけて軍事教練を実施することによって、近代戦に即応する総動員体制をつくりあげる計画を推進した。

この軍縮により豊橋の第十五師団のほか、第十三（高田）・十七（岡山）・十八（久留米）の各師団が廃止されたほか、その下の部隊単位である連隊・大隊も多数削減された。前回の軍縮では実施されなかった、これら部隊の削減は

旧来の部隊（若い番号）を存置・転属・近年設立された部隊（大きい番号）を廃止

という要領で行なわれ、結果として駐留部隊が全廃された都市はほとんどできなかった。部隊への各都市の各種依存度を考慮した、宇垣一成陸軍大臣の政治的手腕の表われといえるが、陸軍内部に与えた部隊削減の衝撃は少なくなく、宇垣への憎しみは残ることになった。

その一方で政界や国民には、宇垣のこの施策は好意的にとられたが、豊橋など師団廃止対象の各地区では、いづれも廃止が覚悟された時期から反対運動が展開された。まさしくそれは、宇垣が日記で示した目論みに応じたものであった。事実豊橋では師団廃止以後、「国防のための軍隊の存在の大切さ」が強調され、山東出兵や満州事変といった、中国大陸への軍事介入・侵襲への支持へとつながっていったのである。

廃止	第十五師団司令部、第十七師団司令部、歩兵第六十連隊、騎兵第十九連隊、野砲兵第二十一連隊、工兵第十五大隊、輜重兵第十五大隊、豊橋南成監獄
新設	高射第一連隊（野砲兵第二十一連隊跡地に）
転入	工兵第三大隊（名古屋より工兵第十五大隊跡地に）
所属変更	歩兵第十八連隊、豊橋衛戍病院、豊橋憲兵分隊、豊橋陸軍兵器支庫（いずれも名古屋第三師団に）

豊橋地区の陸軍部隊の異動（宇垣軍縮実施時）

陸軍教導学校とは

宇垣軍縮による陸軍再編・近代化の延長の施策として、豊橋などに1927（昭和2）年以降設置された下士官（一般召集兵内のいわば管理職）養成機関が陸軍教導学校であった。

課程としては、各部隊で志願した上等兵のなかから連隊長が選抜した者に、まず1年間の隊内教育を施したのち教導学校歩兵科に入学させ、そこで改めて1年間の課程を修了させたあと原隊に戻らせて下士官に任命する方式がとられた。

陸軍予備士官学校とは

教導学校設置後に中国との戦争が全面化して、陸軍幹部としての将校（士官学校を卒業して任官した、少尉以上の職業軍人）の数が不足を来たしはじめたことから、甲種幹部候補生（現役で入隊した高等生者を選抜し、非常時に将校にさせる制度）を専門に教育するために新設された学校。予算上教導学校に併設される形で、豊橋などに1937（昭和12）年に新設された（正式な設置は翌年）。修学期間は約8ヵ月であり、生徒は卒業後すぐに将校の待遇を受けることになっていて、施設は各教導学校のもの転用された。

*予備士官学校の設置後、下士官の養成や訓練は、各地の部隊での実地教育へとしだいに移行。太平洋戦争突入後の1943年8月には、施設を全面的に予備士官学校に転用するために教導学校は全廃となり、一本化された予備士官学校は、敗戦時には「満州国」に置かれたものを含め8校に達した。



陸軍教導学校時代に建設された愛知大学施設
（左）講堂（現第二体育館）（右）コンクリートの壁

旧軍施設から文教施設へ

第十五師団の消滅直後、地元では廃止部隊跡地の払い下げを望む動きがあったがほとんどかなわなかった。そして軍隊の存在意義を「地元発展のため」から「国防防衛のため」へと新聞、さらには住民が視点を移したことで、宇垣一成の目論み通り、豊橋地区は陸軍教導・予備士官学校を中心とした「軍都」の色彩を再度強めることになった。

1945（昭和20）年の敗戦により授業・訓練を停止した豊橋陸軍予備士官学校は、同月末までに復員等の残務処理を無事終えて消滅し、元第十五師団全体の跡地は国有地のまま豊橋市が管理することになった。同市はさっさと、旧軍施設を住宅や官公庁、さらに学校へと転用する利用案を作成した。

そしてまず、街道を挟んで西側の旧予備士官学校砲兵隊敷地に、同年6月の豊橋市街地への空襲で校舎を焼失していた豊橋中学（現時習館高校）が入り、さらに東側の旧本部・歩兵隊敷地に、敗戦により中国・上海で消滅した日本人学校である、東亜同文書院大学から引き揚げてきた関係者による新大学が、翌46年11月15日に愛知大学として当時の文部省より認可され、創設された。周囲のほかの軍用施設にも各学校が入り、敗戦まで「軍隊の街」と呼ばれていた近隣の地区は、「学園の街」と面目を一新した。

旧陸軍予備士官学校の敷地が愛知大学に生まれ変わるまでは、本間喜一元学長をはじめとする旧同文書院関係者有志の一連の努力と情熱や、豊橋市の多大な協力があった。



現在の愛知大学周辺地図（学校が集中していることがわかる）

愛知大学内の旧軍建物群-1960年頃の配置図-



豊橋わが家の模型
記念館2階に展示



愛知大学は前記のように豊橋陸軍予備士官学校の跡地に創設された。当初の建物群の多くは1908（明治41）年の第十五師団設置の折に建設されたものだった。1925（大正14）年の陸軍軍縮で第十五師団は廃止されたが、翌々年に豊橋陸軍教導学校が置かれた。園の中の講堂は教導学校時代の建物であり、天井を支える鉄骨は当時としても特色のあるものだった。1940（昭和15）年に予備士官学校に全面移行して、戦後の愛知大学へと続く。左の配置図および写真の模型は1960（昭和35）年前後のものだが、このころまで軍隊の建物をほぼそのまま活用して運営できていた。しかし、この後からしだいに鉄筋コンクリートの建物が造られてきて、今日、木造建物は小さいものを入れても10ヵ所以下になってしまっている。

戦後、旧軍の施設の跡地には大学や自衛隊が入ったところが多いが、それら大学の多くが統合などで移転した現在、愛知大学に残る木造建物群のうち、本館（当記念館）は、1998（平成10）年に文化庁から登録文化財に指定された。

第十五師団司令部から愛知大学記念館へ

これら展示室がある愛知大学記念館は、1908（明治41）年に旧陸軍第十五師団司令部として建築されたものであり、このほど100歳を過ぎたことになる。この建物は豊橋地区最初の、西洋風の意匠を取り入れた大規模な近代建築とされ、基礎部分のレンガ積はイギリス風、外壁はドイツ風、玄関入口はイタリア風と、西洋各国の意匠がふんだんに取り入れられているが、豪華さよりも効率性を重視した設計・デザインとなっていて、左右対称・E字形の配置ともども、当時の陸軍師団司令部としての標準的な造りであった。

1925（大正14）年の第十五師団廃止のあとは、騎兵旅団など存置・新設部隊の司令部に使用されたが、1933（昭和8）年の教導学校拡張時に同学校の本部に転用され、続く予備士官学校への移行にもない、豊橋陸軍予備士官学校の本部として敗戦を迎えた。



豊橋第一陸軍予備士官学校当時 1944年頃

「本部」としての機能を活用する形で、1946（昭和21）年の愛知大学創設時から同大学本館となったこの建物は、旧軍隊時代ほとんど変わらぬ姿を保ったまま、愛知大学の教職員や学生に「愛火のホワイトハウス」として親しまれつづけた。1990年代初めには本館建て替えにともない取り壊す話が出たものの、歴史的建造物としての価値が認められて残されることになった本館は、1996（平成8）年に後部に新本館が竣工してからは大学記念館となり、修復のうえ98年には文化庁より登録有形文化財に指定され、21世紀のこころへと至っている。

愛知大学旧公館（元第十五師団長官舎ほか）

愛知大学豊橋校舎から北東に5分ほど歩いた、新幹線の車窓からも見える小高い丘の上に、「愛知大学」の立て看板のある教職員住宅とともにある古い洋館のような建物は、現在は大学の案内図に入っていないが、「公館」としてかつて使われていた施設である。この建物は1912（明治45・大正元）年に旧第十五師団長官舎として建設されたのであり、1917年に同師団長となった久瀨宮邦彦王の娘である、のちの昭和天皇皇后もここで少女時代の一時期生活されていた。



公館室内

洋館と日本館とを巧みに折衷した造りであり、前面の公的部分に洋室を、背後の私的部分に和室を配している。洋室にはシャンデリアや暖炉が残っていて、外観では張出し窓や赤レンガの煙突がアクセントになっている。

第十五師団廃止後は教導・予備士官学校長の官舎などに、愛知大学創立後しばらくは学長はじめ教職員の住宅に、そして二十数年前までは外来教員の宿舎などに使用されていたが、老朽化のため現在は使用されていない。しかし、現在



も戦前の雰囲気を感じ出している旧公館は、この大学記念館ともども映画やテレビドラマのロケに使われているのであり、同じ「旧師団長官舎」としては、新潟県上越市高田や福岡県久留米市などのものが整備復元され、公開されている（2階のタッチパネルに、それぞれの画像を収録）。

豊橋校地北部整備による学生寮などの消滅

この愛知大学豊橋校舎の、西側に沿って南北に走る国道259号線および、北側に沿って東西に走る石巻赤根線の改良工事の進行と併行して、豊橋校舎全校地の3分の1に当たる北部一帯の整備計画が、1982（昭和57）年12月から数年の歳月をかけて進められた。

これにより、初代大学院棟・学生会館に食堂・柔道場、重量挙げ練習場、旧合宿所、科学館といった、旧軍時代からの建造物（おもに木造平屋）が相次いで取り壊され、立木の移植も行なわれた結果、本学創立以来の豊橋校地北部の様相は一変した。また、工事の一環として施工された、豊橋鉄道美濃線の立体交差化にともない、同線の仮線路が本学グラウンド北西部を斜めに横切って敷かれ、学内で電車が走っているという珍風景がこの一時期見られた。しばらく北部に残っていた学生寮2棟（思草寮・翠嵐寮、旧兵舎）も、老朽化が進んだことにより1988（昭和63）年にその幕を下ろし、ほどなく撤去された。しかしその後学生寮跡地には、寮歌が刻まれた記念碑が建てられた。



取壊し直前の学生寮と跡地に建てられた記念碑

（パネル中の「宇垣一成陸軍大臣」写真は、インターネットのものを使用いたしました）

・企画展の展示品キャプション・写真

（以下、展示品の各写真は企画展終了、会場撤収後に撮影したため、状況が展示の時点とは若干異なっています。ご了承ください）

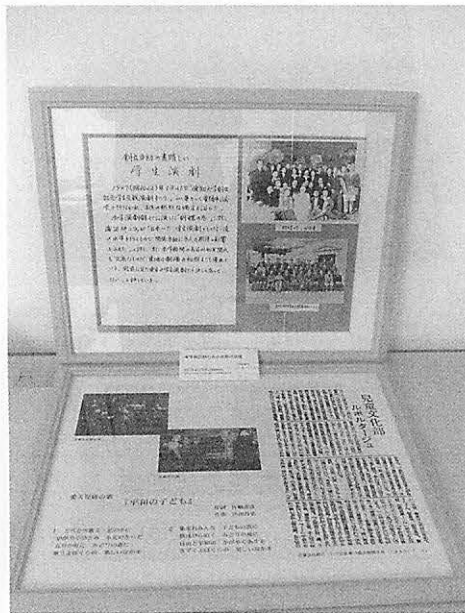
〔学生・卒業生用〕

①

本学創設期の各文化部の活躍

1950年代

現在の児童文化研究会と演劇研究会について。
そのほかの各文化部も輝かしい実績をあげた

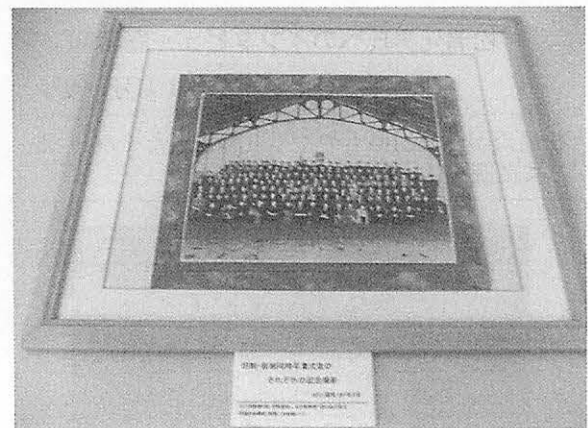


②

旧制・新制同時卒業式後のそれぞれの記念撮影

1953（昭和28）年3月

上が旧制第6回（旧制最後）、下が新制第1回の
各卒業生。豊橋校舎講堂（現第二体育館）にて



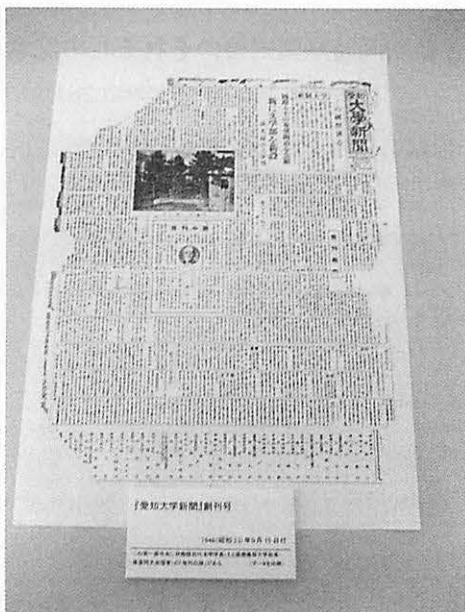
（実際の企画展では上の写真を左、下のを右に配置して説明）

③

『愛知大学新聞』創刊号

1948 (昭和 23) 年 9 月 15 日付

この第一面中央に林毅陸初代本学学長（もと慶應義塾大学 総長・東亜同文会理事）の「発刊の辞」がある（データを印刷）

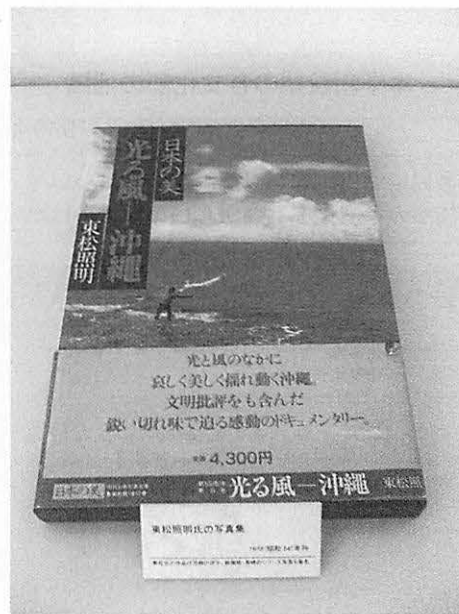


④

東松照明氏の写真集

1979 (昭和 54) 年刊

東松氏の作品は沖縄のほか、被爆地・長崎のシリーズ写真も著名



⑤

松浦元男氏へのインタビュー記事

『東三河』2008年11月号の複写

松浦氏が「愛知県ものづくりの匠（たくみ）」として認証を受けたときのもの

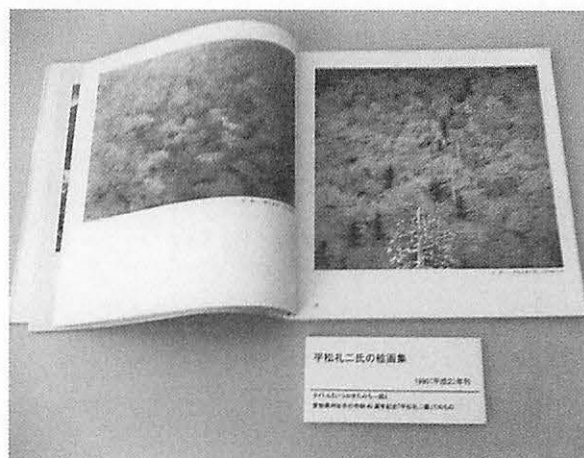


⑥

平松礼二氏の絵画集

1990 (平成 2) 年刊

タイトル『いつかきたみち一路』。愛知県刈谷市の市制 40 周年記念「平松礼二展」でのもの

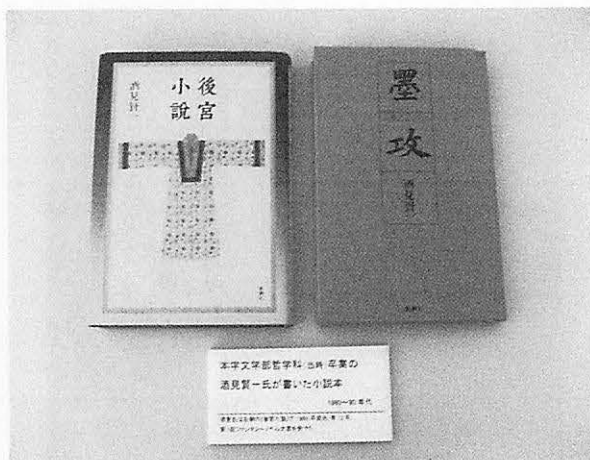


⑦

本学文学部哲学科（当時）卒業の
酒見賢一氏が書いた小説本

1980～90年代

酒見氏は左側の『後宮小説』で1989（平成元）年
12月、第1回ファンタジーノベル大賞を受けた



⑧

本学創設期の各運動部の優勝・入賞記念品

1950～60年代

2000年のシドニー五輪柔道金メダリストである
井上康生氏の両親は、ともに当時の愛知大学柔道
部のOB・OG

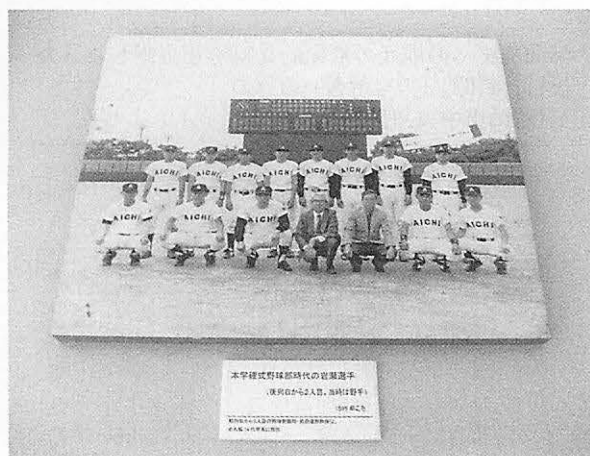


⑨

本学硬式野球部時代の岩瀬選手

（後列右から2人目。当時は野手）
1995年ころ

前列右から3人目の野球部顧問・武田信照教授は、
のち第14代学長に就任

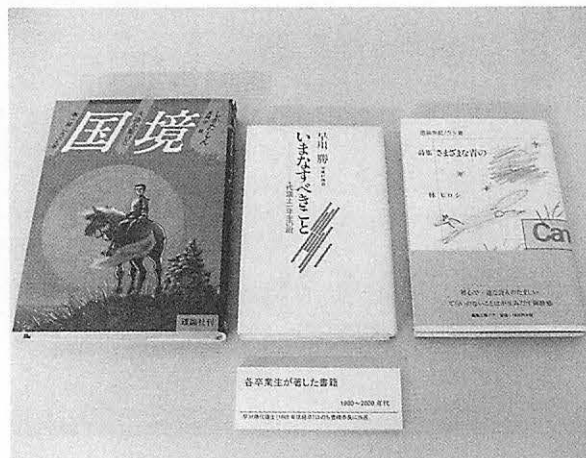


⑩

各卒業生が著した書籍

1980～2000年代

早川勝代議士（1966年法経卒）はのち豊橋市長
に当選



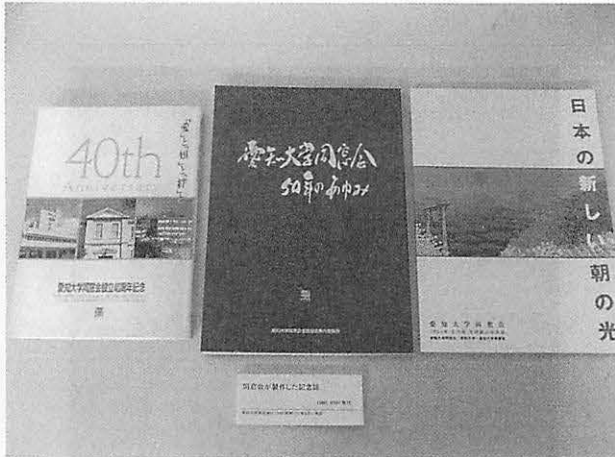


⑪

同窓会が製作した記念誌

1990、2000年代

愛知大学同窓会は1952(昭和27)年2月に発足

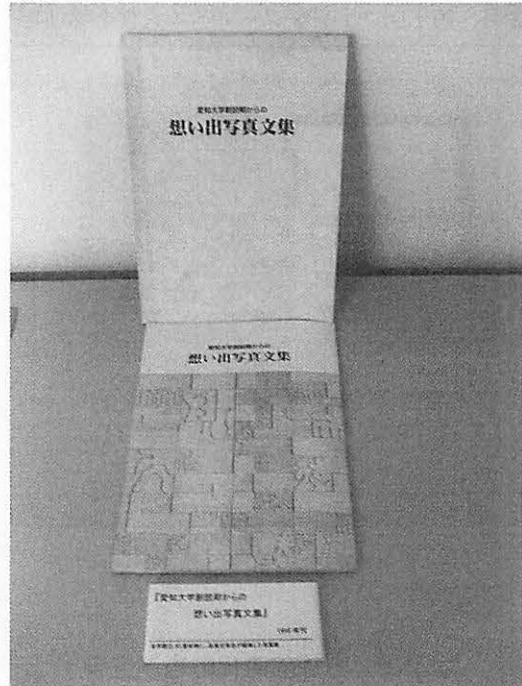


⑫

『愛知大学創設期からの思い出写真文集』

1996年刊

本学創立50周年時に、卒業生有志が編集した写真集



〔旧軍施設用〕

①

第十五師団施設落成記念絵葉書(複製・拡大)

1908(明治41)年

額左上 師団司令部(現愛知大学記念館)

額右下 偕行社(のち愛知大学短期大学部本館)



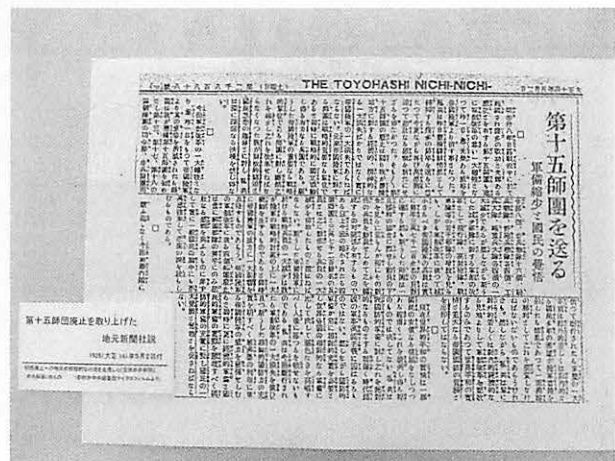
②

第十五師団廃止を取り上げた地元新聞社説

1925(大正14)年5月2日付

師団廃止への地元の積極的な対処を主張した『豊橋日日新聞』(のち解散)のもの

(豊橋市中央図書館マイクロフィルムより)



③

豊橋陸軍教導学校歩兵科のアルバム

1936（昭和11）年

陸軍教導学校歩兵科は豊橋のほか、仙台と熊本にもあった（有森茂生氏寄贈）

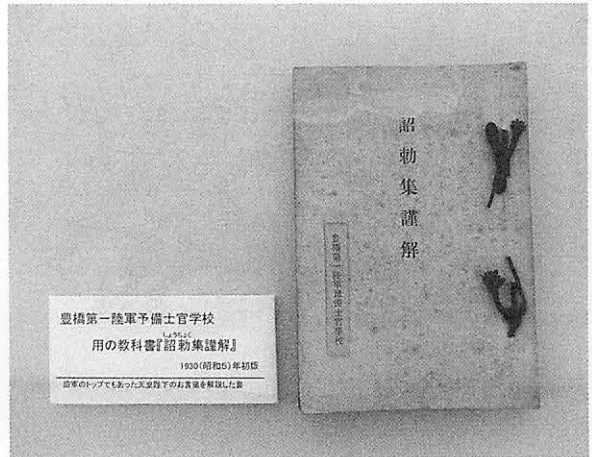


④

豊橋第一陸軍予備士官学校用の
教科書『しょうちよく詔勅集謹解』

1930（昭和5）年初版

旧軍のトップでもあった天皇陛下のお言葉を解説した書



⑤

豊橋第一予備士官学校砲兵生徒隊の
卒業アルバム『けんざん研鑽の頃』

1943（昭和18）年

砲兵生徒隊は旧野砲兵連隊の地（現県立時習館高校所在地）に設置されていた

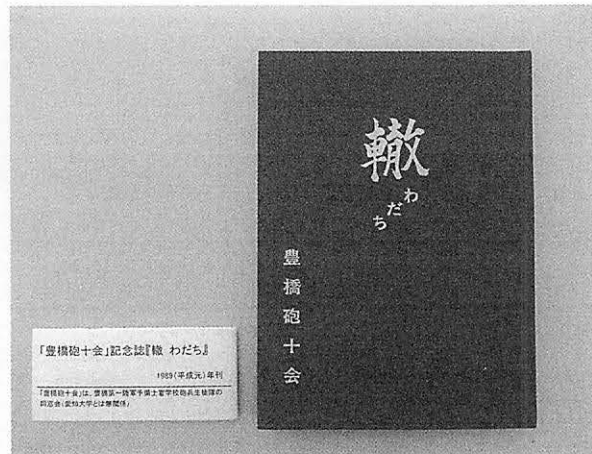


⑥

「豊橋砲十会」記念誌『轍わだち』

1989（平成元）年刊

「豊橋砲十会」は、豊橋第一陸軍予備士官学校砲兵生徒隊の同窓会（愛知大学とは無関係）

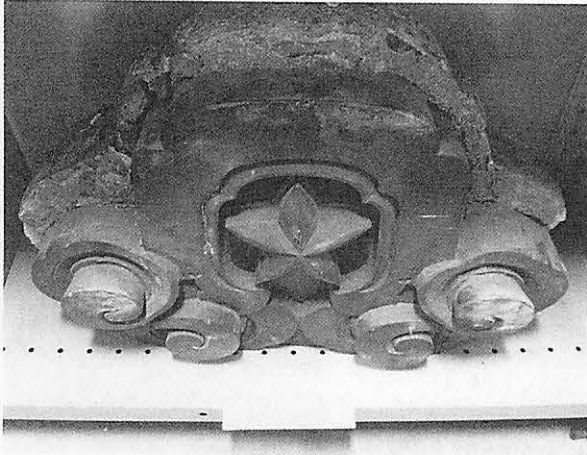


⑦

旧陸軍を示すマークが記された鬼瓦

現記念館後部（1995年取壊し）か

この「星マーク」は鬼瓦のほか、現研究所棟（旧将校集会所）の旧出入口上部にも見られる



⑧

旧陸軍を示すマークが削られた鬼瓦

現記念館後部（1995年取壊し）か

この「星マーク」は愛知大学創設直後、査察に来た占領軍に誤解されないよう、目立つ部分が一部撤去された



⑨

旧陸軍を示すマークが記された灰皿

愛知大学所有

灰皿のみならず旧陸軍が遺した各種の備品・消耗品は、物資不足のなか創設された愛知大学に役立った

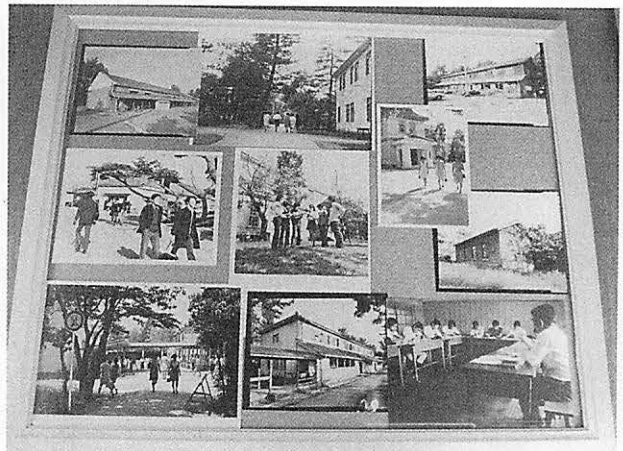


⑩

旧軍施設を中心とした、かつての学内風景

1950～60年代

教室のあった旧軍建物は、1970年代前半までに建て替えられた

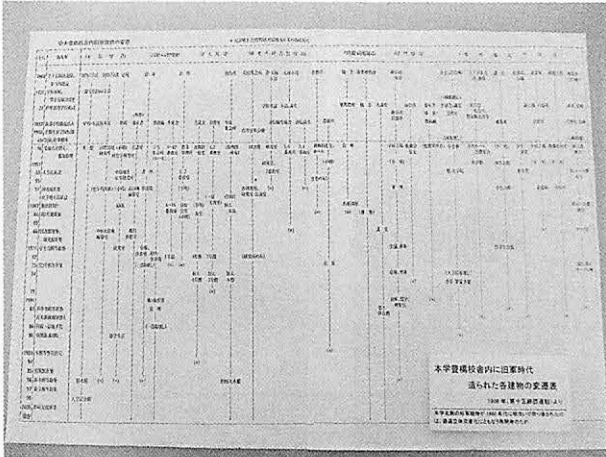


⑪

本学豊橋校舎内に旧軍時代造られた各建物の変遷表

1908年（第十五師団進駐）より

本学北側の旧軍建物が1980年代に相次いで取り壊されたのは、鉄道立体交差化にともなう再開発のため



⑫

愛知大学豊橋校舎の航空写真

2005（平成17）年ころ

旧軍以来の建物が数少なくなった、創立60周年の時期のもの

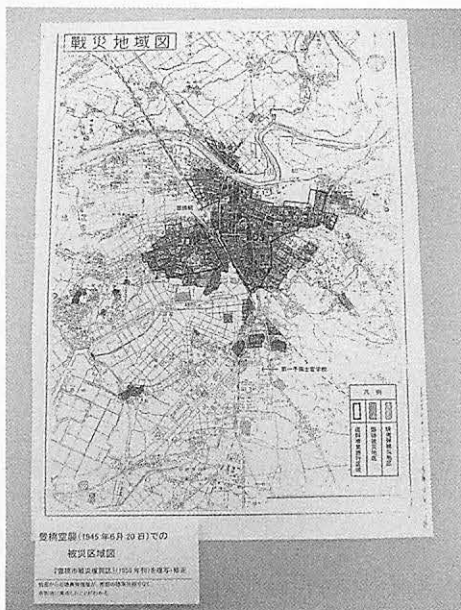


⑬

豊橋空襲（1945年6月20日）での被災区域図

『豊橋市戦災復興誌』（1958年刊）を複写・修正

前夜からの焼夷弾爆撃が、南部の陸軍施設でなく市街地に集中したことがわかる



⑭

旧陸軍と豊橋との関係について述べている各書

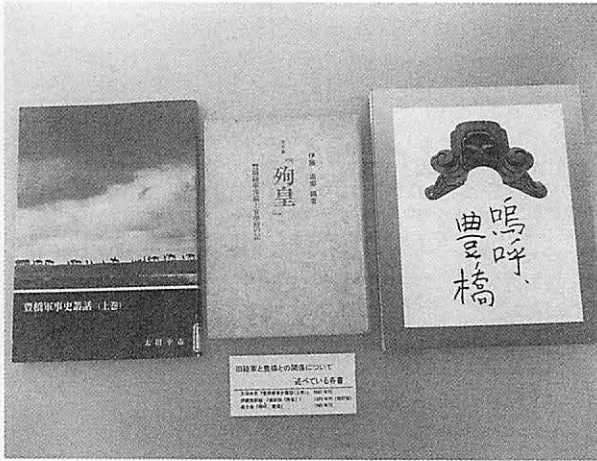
- 豊橋市『とよはしの歴史』 1996年刊
- 兵東政夫『軍都豊橋』 2007年刊
- 兵東政夫『歩兵第十八聯隊史』 1994年刊（改訂版）
- 浪崎敏武遺作『豊橋陸軍教導学校史（稿）』 1990年刊



⑮

旧陸軍と豊橋との関係について述べている各書

太田幸市『豊橋軍事史叢話（上巻）』 2007年刊
 伊藤崇郎編『復刻版『殉皇』』 1980年刊（増訂版）
 高士会『嗚呼、豊橋』 1995年刊



⑯

旧陸軍と豊橋との関係について述べている各書

水口源彦『南栄町物語』 1996年刊
 あいち・平和のための戦争展実行委員会
 『愛知の戦争遺跡ガイド』 1997年刊

